

保育における「情報環境」に関する一研究

－オムツ交換時の事例報告－

○ 飯田恵津子 大里美保子 宮原英種 宮原和子
(筑紫郡青葉保育園) (筑紫郡青葉保育園) (第一経済大学) (近畿大学九州短期大学)

子どもは、環境との絶え間ない相互交渉を通して成長・発達する。その子どもと環境との「相互交渉」は、子どもが母親の乳房を吸うという行為から始まり、この吸乳で始まる相互交渉は、やがてその多くが「情動的」な相互交渉へと移っていく(宮原、宮原、1997)。つまり、多くの相互交渉は「情報」のやりとりであり、子どもは目に見えない環境からの「情報」を通して成長・発達するものであると考えられる。

保育実践のなかで、人的環境である保育者からの「情報」のひとつとして考えられるのは、ことばや表情、態度である。子どもは視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚といった感覚器官を通して、保育者からの「情報」をキャッチし、その「情報」に対して、手や足、身体全体で反応を示したりあるいはことば、表情などで反応を返したりする。こうした子どもの反応に再び保育者が応えといった「相互交渉」が子どもの成長・発達に大変重要であるといえるであろう。そこで、日常生活のなかで、子どもがどのような「情報」と相互交渉をしているかを客観的に知ることは、保育にとって大変大切なことであると思われる。

本研究においては、日常的な保育ルーチンであるオムツ交換の場面で、保育者が子どもとのかかわりを通してどのような「情報」をことばや行為で示し、またその「情報」を子どもがどの感覚器官から受け取り、どのような行動特徴を示しているのかを観察し、分析することを目的とする。

方法

A 保育園において、オムツ交換時の保育者と子どもをVTRによって観察記録し、保育者の情報と子どもの行動特徴を分析、検討した。

対象：U 男 3 ヶ月と保育者、K 男 1 歳 3 ヶ月と保育者、A 子 1 歳 10 ヶ月と保育者

結果と考察

表1、2、3は保育者から子どもに与えた情報と、それに対する子どもの行動特徴を示した。その行動特徴が表出する前に、情報を取り入れた感覚器官をカッコの中に示した。

表1では保育者が目の前に顔をもってくると保育者を見るという行動は起こすが、すぐ目をそらすなど関心は示さない。しかし声をかけるといった聴覚での情報を同時に出すと大きく反応した。保育者が距離をおいて話しかけたときは反応が見られなかった。

また、お尻を触る、抱きあげるといった体に触れられることで手足を動かすといった触覚での情報に対して大きく反応を示した。この頃の子どもは視覚、聴覚、触覚で情報をキャッチするが、その場合、情報との距離が反応の大きさを表し、特に、直接肌や体に触れるといった触覚での情報のキャッチが最も多いと考えられる。

表1 U男の場合の保育者からの情報と子どもの行動特徴

保育者からの情報	子どもの行動特徴
「Uちゃんオムツ替えようね」と2Mの距離から声をかける。	→反応なし
U男の前に顔を近付ける。	→保育者を見るが、すぐ目をそらす。(視覚)
「Uちゃん、Uちゃん」とすぐ近くで声をかける。	→笑顔になって手足を動かす。(視覚・聴覚)
抱き上げる。	→「アッアッ」といって手足を動かす。(触覚)
「Uちゃんオムツをはずすからね」という。	→反応なし
オムツをはずす。	→両足を動かす。(触覚)
「お尻を上げるよ」という。	→反応なし
お尻を触る。	→両足を動かす(触覚)
「オムツを入れるよ」という。	→反応なし
乾いたオムツを入れる。	→お尻、両足を動かす。(触覚)
「きれいになったね」という。	→反応なし
「Uちゃん右足をズボンに入れるよ」といって右足を触る。	→右足を動かす。(触覚・聴覚)
「きれいになったよ」と顔を近づけていう。	→「あっあっ」と声をだし笑顔で手足を動かす。(視覚・聴覚)
抱き上げる	→手足を動かす。(触覚)

表2では子どもの行動がより複雑になっている。「Kちゃんオムツ替えようか」といったことばには、保育者が側に来たので保育者の顔を見たが、ことばの意味を理解していないので交換台の方へは関心を寄せない。このことは、ことばの理解ではなく、視覚や聴覚といった感覚器官で反応したと考えられる。K男は7か月前に入園しており、担当制を行っているA園では、その間、同じ保育者から繰り返しオムツ交換を受けている。お尻を触る、ズボンを見せるといった保育者がくりかえしてきた情報を視覚、聴覚情報を受け取り、お尻を浮かす、足を差し出すといった動作で反応を返した。このことは、次にオムツが当てられる、次にズボンを履くといった行動の予測をすることができているものと思われる。交換が終わるといつも手をとって起こしてもらっているK

男は、保育者がシャツを整えているとき、もう自分から手を前に出しているといった動作も同じことが言える。この時期の子どもは視覚だけ、あるいは聴覚だけの感覚器官での情報のキャッチが増えてくる。

表2 K男の場合の保育者からの情報と子どもの行動特徴

保育者からの情報	子どもの行動特徴
「Kちゃんオムツ替えようか」	
と側に行って声をかける。	→保育者を見る。(聴覚・視覚)
手を差し出す	→手を差し出す。(視覚)
手をつなぐ。	→手をつないで歩く。(触覚)
「ここよ。シッシは？」という	→目を左右に動かす。(聴覚)
「シッシここよ」とK男のお	
尻を指さす。	→保育者の指先を見て、お尻を たたく。(視覚)
抱き上げ交換台に座らせる。	→座る。(触覚)
「ゴロンして。ねんね」という。	→反応なし
K男の体を寝せる。	→寝る。(触覚)
「ズボンぬぐよ」という。	→反応なし
ズボンを下げる。	→足を上げる。(触覚)
「オムツとるよ」という。	→反応なし
オムツをはずす。	→お尻を少し浮かす。(触覚)
「お尻を上げて」という。	→反応なし
お尻を触る。	→足を曲げてお尻を浮かす。 (触覚)
「Kちゃんズボンはくよ」とい	
いながらズボンを見せる。	→ズボンを見て両足を上げる。 (視覚)
「右足ね」と言って右足を触る。	→ズボンの穴に右足のつま先を 伸ばして入れようとする。 (触覚)
「そうね右足ね」といって右足	
をズボンに入れる。	→次に左足を前に出す。 (視覚)
シャツをきれいに整える。	→自分で起きようと「アッ」と いいながら両腕を差し出す。 (触覚)
K男の手を取り体を起こす。	
抱き上げるようにして立たせる	→遊びの場所を見る。(触覚)

表3では「おしっこにいかうか」といった保育者のことばだけで子どもは自分からトイレの場所に行き、交換台にも自分から座った。このことは、保育者からの情報を聴覚だけでキャッチし、それを理解し行動を起こしている。ズボンを脱がせるときには自分で足を交互に出して、保育者が脱がせやすいように協力している。また、オムツをはずすと自分からお尻を浮かせるといった動作も排泄に関する次の行動を予測して、みずから動作として反応したことになる。このようにこの頃の子どもは感覚器官で受け取った情報を、意識として頭のなかにつくりだし、ことばや動作で表出する。その場合子どもは情報であることばを理解できるため聴覚だけで、また、保育者の行為を模倣することができるので視覚の感覚器官だけで情報をキャッチし、反応を返すようになる。

表3 A子の場合の保育者のから情報と子どもの行動特徴

保育者からの情報	子どもの行動特徴
「おしっこにいかうか」と側に 行って声をかける。	→にっこり笑う。(視覚・聴覚)
「うん」とうなづく	
立ち上がりトイレの方を向く。	→保育者の前を歩き、トイレの 方に自分から行き、交換台に 座る。(視覚)
「ゴロンしようね。できる？」	→横になる。(聴覚)
「できたね」	
「ズボン脱ぐよ」という。	→ズボンに手をかける。(聴覚)
ズボンを脱がせる。	→脱ぎやすくするため足を交互 に出す。(触覚)
「ここ持って」とシャツを指す	→シャツを持つ(視覚・聴覚)
「ありがとう、あやちゃん」	
オムツをはずす	→お尻を浮かす(触覚)
「お尻あげてくれたね。たくさ んでてたよ」	
手を差し出す。	→保育者の手を握り起きあがる。 (触覚)
「おしっこでる？」	→うなづく。(聴覚)
	自分から便器に座る。
「そうそう、そこもってて」	←シャツを持ち上げる。
「でない？」	←「シーシー」という
	←立ち上がり、水を流す。
「お手で洗おうね」という。	→手洗い場所に行き、蛇口を手 を差し出す。(聴覚)
「濡れるから袖あげようね」と いう	→反応なし
繰り返しいいながら袖をまくる。	→腕の前にまっすぐ出す。(触 覚)
「ゴシゴシきれいにするよ」と いう。	→反応なし
繰り返しいいながら手をこすつ て見せる。	→保育者の手を見ながら自分の 手をこする。(視覚)

これらのことから、子どもは保育者からのことばや表情動作による「情報」を五感をとおしてキャッチし、それに対してことばや動作で表出することがわかった。子どもの行動特徴をみると、情報のキャッチの仕方にも順序性があり、日常の繰り返しのなかで触覚、視覚、聴覚への情報を与えられた子どもは、次の行動を予測することができるようになる。今回の排泄に関する事例では、子どもは触覚で情報をキャッチしていたものを相互交渉を繰り返していくうちに、次第に聴覚という感覚器官だけで情報をキャッチし、反応を返すようになって考えられる。そうした子どもの行動特徴を保育者が理解して、次にどのような情報を出していけばよいのか意識することが大切である。また、子どもから情報をだすこともあり、子どもからの情報を見逃すことなく、適切に受容し応答することが大切である。こうした情報による相互交渉が日常生活のなかでおこなわれることで、排泄に関する自立へと向かわせるのである。